日本医史学雑誌　第67巻第1号（2021）　48–64

合田強の『西洋醫述　巻四』に書かれた図の原典から明らかになった事：（1）本草図篇

板野　俊文

香川大学

受付：令和2年3月10日／受理：令和3年1月15日

要旨：合田強は江戸中期の讃岐の医家で，阿蘭陀大通詞の吉雄耕牛の成秀館で学んだ講義録五巻と，それをまとめた一冊の本を書き残した．講義録の『西洋醫述　巻四』には，薬草や鼠径ヘルニアの男性の図などが模写されている．本編ではまずここに書かれた薬草類の原典をあきらかにした．これはレンベルト・ドドネウスの『Cruydt-Boeck（草木誌）』であった．これは，野呂元丈や青木昆陽から始まった日本の蘭学で最もよく研究された本草書であり，吉雄家三代も関わる重要な阿蘭陀語の原本である．そこで，次に吉雄家と『草木誌』との関連を明らかにした．さらに，吉雄家が関係する『草木誌』の年代ごとの翻訳書の内容や特徴を概説し，これらと比較することで，本講義録の歴史上における位置づけを行った．以上より，阿蘭陀本草学の日本における受容と，吉雄耕牛が果たした役割を明らかにした．

キーワード：合田強，吉雄耕牛，西洋醫述　巻四，ドドネウス，草木誌

1　はじめに

合田強[1]の『西洋醫述　巻四』[2]（以下『巻四』と略す）は，宝暦12年（1762）に阿蘭陀大通詞の吉雄耕牛[3]の成秀館で受けた講義録五巻中の第四巻である．筆者らは，これらの5巻の講義録を全て翻刻し，報告した[4–7]．翻刻が終了した現在，これらの講義録に書かれた図や内容に関して解明を行っている[8]．本論文では『巻四』について明らかにする．「薬草の図」と共に「脱腸帯をまとう男」などが模写されている．薬草類はレンベルト・ドドネウスの『Cruydt-Boeck（草木誌）』によると思われた．それを証明する目的で，インターネットで検索を行い，画かれた図とほぼ同じ図を見つけた[9]．本論文ではこれらの情報について報告すると同時に，我が国での本草学の受容における吉雄耕牛の貢献について述べる．

2　『巻四』に画かれた図の解説

まず，概要を示すため，『巻四』に画かれた全ての図を順番どおりに示す（図1）．この内，第1番目と5番目の図は本草とは関係しないので，本論文では言及しない．なお植物の図は後に原図と照合するために再掲する．

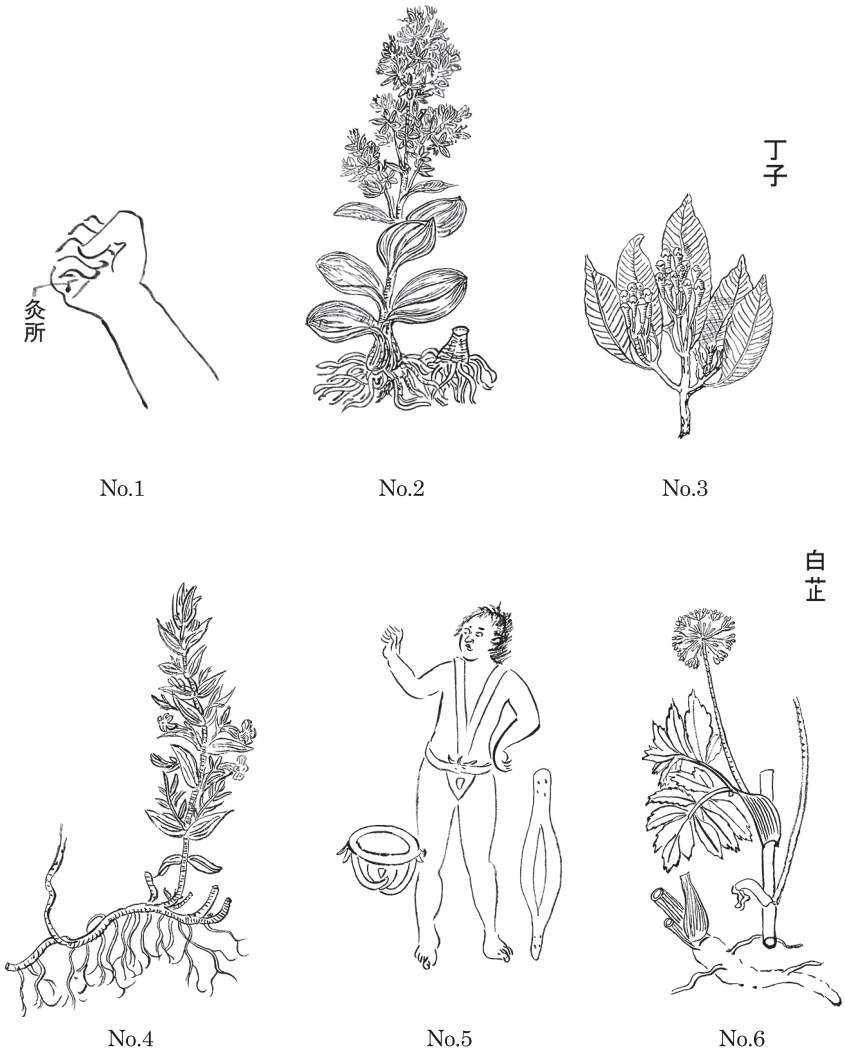


図1　『巻四』に画かれた図を画かれた順番どおりに示す（小さい図は除く）.

3　インターネットネット検索による『Cruydt-Boeck（草木誌）』の原図と『巻四』の写図との照合

まず『草木誌』の概要を解説する．

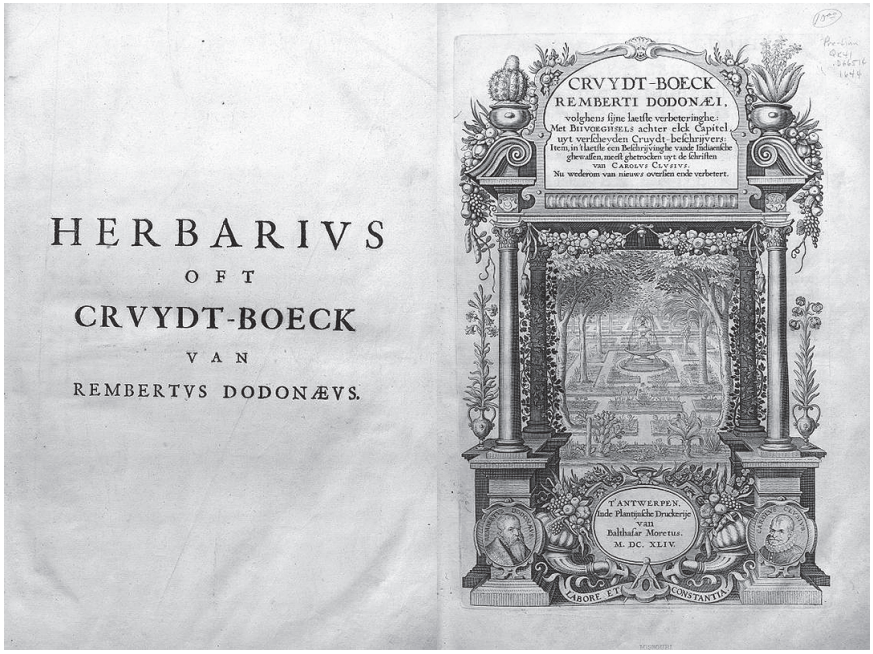


図2　『草木誌』の書誌（附録1参照）

Cruydt-boeck Remberti Dodonaei volghens sijne laetste verbeteringhe: met biivoeghsels achter elck capitel, uyt verscheyden cruydt-beschrijvers.
By Dodoens, Rembert, 1517–1585
Clusius, Carolus, 1526–1609
Raphelengien, Franciscus, 1539–1597
Raphelengius, Justus, 1573–1628
Moretus, Balthasar 1615–1674
Publication Details
T'Antwerpen: Inde Plantijnsche Druckerije van Balthasar Moretus, 1644.
Year 1644
Holding Institution
Missouri Botanical Garden, Peter H. Raven Library

Biodiversity Heritage Library（BHL）がホームページの名称でURLは以下のとおり．

https://www.biodiversitylibrary.org/item/30655#page/41/mode/thumb

上記のページに入ればこの全ページを閲覧することが出来る（ミズーリー植物園，ピーターH. ラヴェン図書館所蔵）．

本文は1492ページで約1450の図が掲載されている．1ページごとに0から最大4枚の図が載せてあり，平均すれば大体1ページに1枚の図ということになる．

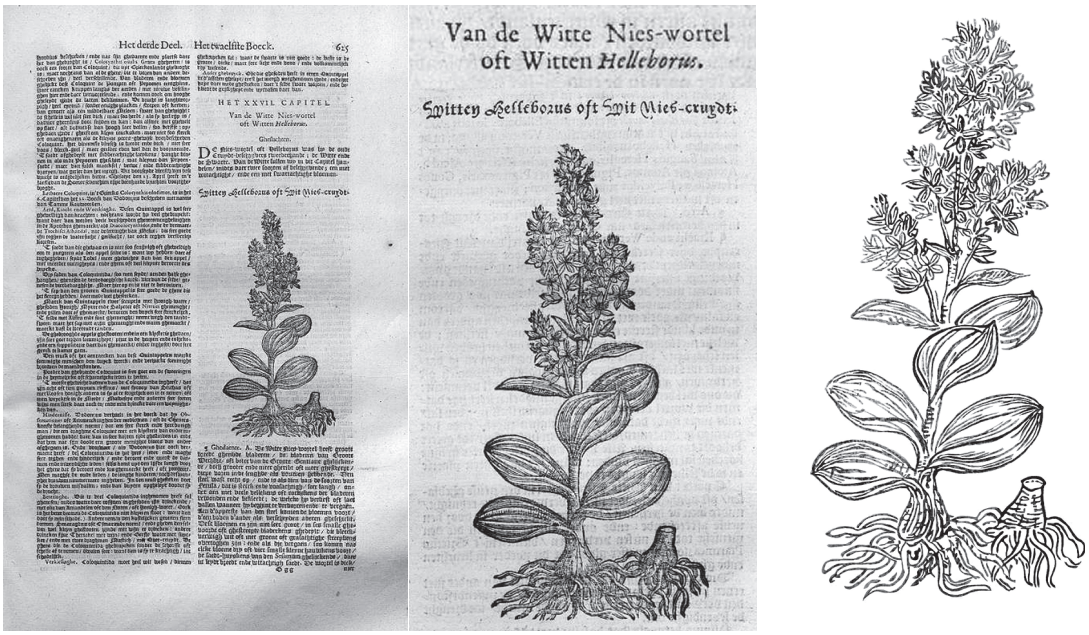


図 3　625 ページの全ページ図（左），植物の図のタイトルと拡大図（中），『巻四』の図　No. 2（右）.

拡大図のタイトル

Witten Helleborus oft Wit Mies-cruydt

Helleboor（巻末の索引の 625 ページから名前を推定した）．さらに拡大図の上に図のタイトルを示したが Helleborus で検索を行い，ヘレボルスという名称を見つけた．クリスマスローズが現在の和名．『巻四』では本文中に解説はない．

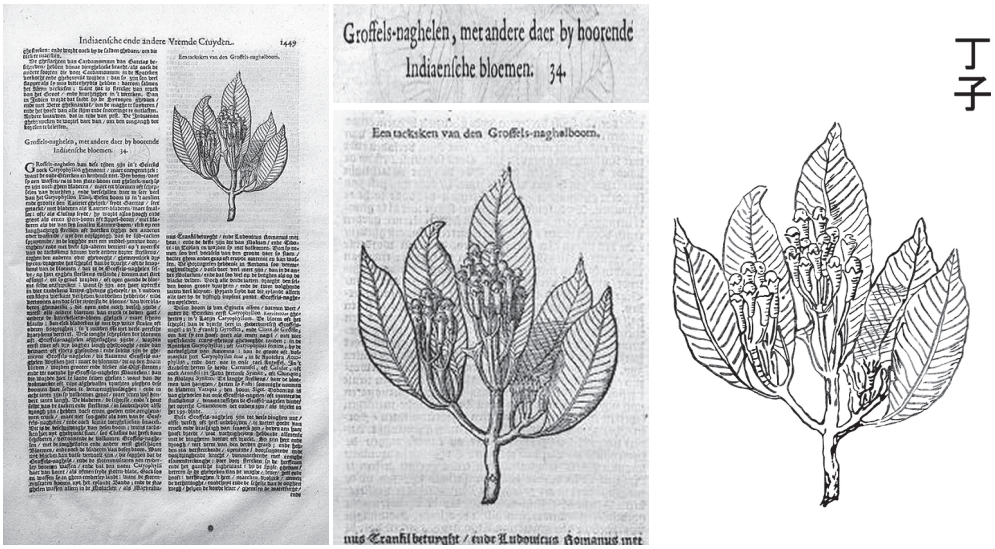


図 4　1449 ページの全ページ図（左），植物の拡大図（中），『巻四』の図　No. 3（右）.

拡大図のタイトル
Een tachsken van den Groffels-naghelboom
和名は丁子．『巻四』の解説の内容は以下のとおり．なお薬における分類は突薬である．

右ツキ薬ノ仕方　□屋ノ形ノリ袋又ハフタ［豚］ノ胃袋ヲ以テ右薬温メシホリ入也　其上ニテ病人盛者ハ足ヨリ血ヲトル　血弱者ハ不取ノトンツケ薬ハヒキ
外　ヲミコロシ　小シイイ同分丁子油見合入

なお，この解説は耕牛の講義中の解説（醫述）を，強がそのまま書いたものと推察される．つまり，この内容は原本に書かれた内容の日本語訳と思われる．灌腸の装置については附録2を参照されたい．

『最新生薬学　第2版』[10] によれば
チョウジ　丁香，丁子　*Caryophylli Flos*,（英）*Clove*
来原植物　*Syzygium aromaticum* Merr, et Perry
効用　漢方処方用薬．芳香健胃薬，吃逆抑制薬とみなされる処方に配合されている．

図5　512ページの全ページ図（左），植物の拡大図（中），『巻四』の図　No. 6（右）．

右上の部分は書かれていないが，画かれた他の部分を見ればこの図で正しいと思われる．
拡大図のタイトル
Archangelica oft Water-Angelica
Archangelica はセイヨウトウキ．学名　*Angelica archangelica* L.
『巻四』の解説の内容は以下のとおり．なお薬の分類は汗薬である．

アゲリイカ　白芷
根実ヲ用　発散也
発汗　不用于時疫
胸中之病多用咳
血痰喘息去痰
腹痛去腸胃穢物

既に丁子の項でも述べたが，この内容も原本の要約と考えられる．ただし，耕牛には漢方医学の素養があったとは思えない．しかし，強は古医方に熟達していたため，このような漢文調の文章を書いたと考えた．なお，両者に中国の本草学の知識があったか，否かについては不明であるが，その経歴からは，このことは窺えない．
『最新生薬学　第2版』[11] によれば

ビャクシ　白芷　*Angelicae Dahuricae Radix*,（英）*Angelica dahurica root*,
来原植物　ヨロイグサ　*Angelica dahurica Benth. Et Hook. Fil. Ex Franch. Et Savat.*
薬効・応用　漢方で解熱，鎮痛，解毒，排膿薬などに配合

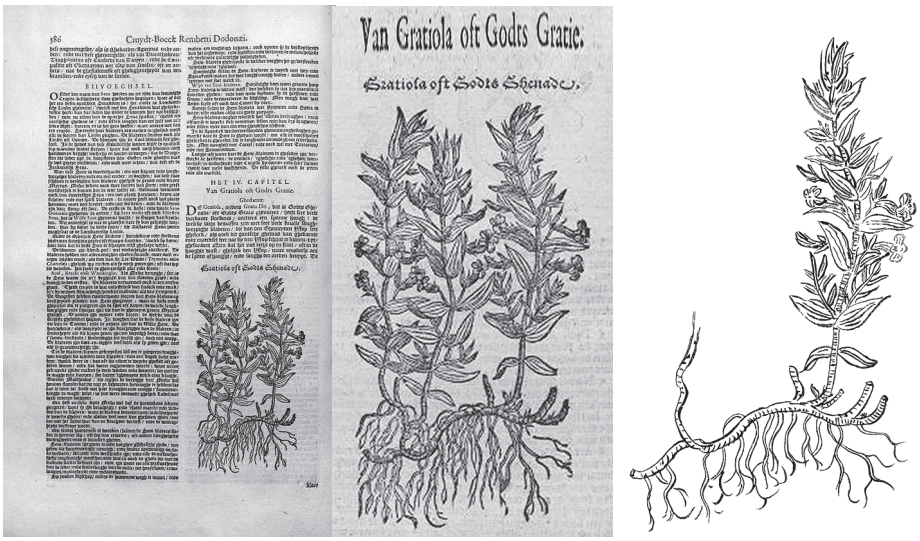


図6　586ページの全ページ図（左），植物の拡大図（中），『巻四』の図　No.4（右）.

中と左の葉と花の部分は書かれていないが，画かれた他の部分を見ればこの図で正しいと思われる.
拡大図のタイトル
Gratiola oft Godts Grenade
Gratiola はグラティオラ，学名は *Gratiola officinalis*
『巻四』の解説の内容は以下のとおり．なお薬の分類は吐薬である.

ガラテヨルノ図
極テ苦　吐薬也　用一味則為吐
如茶而用　則去水気
花色紫ノ色ノサメタル如キ花ナリ　高五六寸

『最新生薬学　第2版』[10] には，該当する薬物は無い.

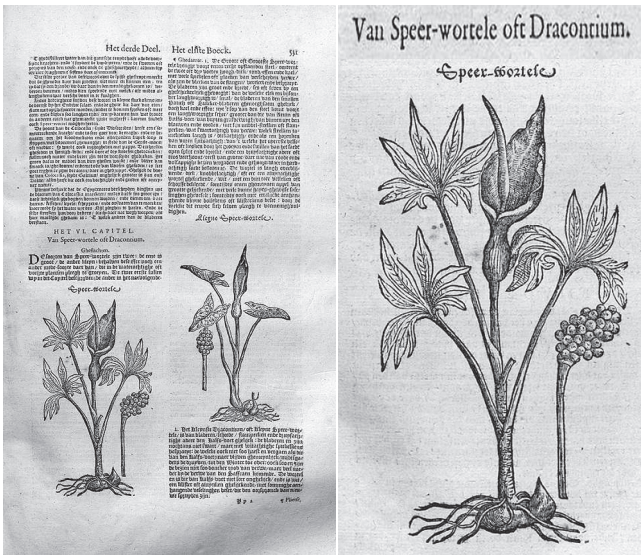


図7　531ページの全ページ図（左），植物の図のタイトルと拡大図（右），『巻四』の図は無い．

拡大図のタイトル

Speer-wortele

和名は半夏．『巻四』の解説の内容は以下のとおり．なお薬における分類は鎮吐去痰薬である．

五百三十（注：実際の図は531ページ）
　スペイル　ヲルトル
○半夏　清腸胃去痰　沐服誤薬　服半夏
△白シテネハネハスル物也　○葉ヲモンデ金瘡ニ付テヨシ　乾カスモノ也
金瘡ニツケルトシメルモノ也○瘰癧（カンカル）ニ用ル也○鼻痔（ボレイヒス）ニ実ヲ付ル也　目ノ痛ニ汁ヲ付ル・蝮（アンツテルスランガ）　蛇　ガヲソレルモノ也　是ヲ帯シメヲレハ山中ニテ蛇カ畏ル丶也

『最新生薬学　第2版』[10]によれば　p. 212–213
半夏，カラスビシャク，（英）*Pinellia ternate Breit*,
（サトイモ科　*Araceae*）
使用部分　コルク層を除いた塊茎
薬効・応用　鎮吐作用．漢方で鎮咳去痰，健胃消化薬等に配合

4　ドドネウスと吉雄耕牛の関連について

八代将軍徳川吉宗は紅葉山文庫に所蔵されていたドドネウスの『草木誌』を一見してとりことなり，儒者の青木昆陽と医官の野呂元丈に命じて，オランダ語を学習させ，これを翻訳させることにした．その後，蘭書の輸入もゆるめられた[12]．これこそが，我国の蘭学の始まりといっても過言ではない．吉宗の意図するところは，単なる好みだけではなく，日本で薬草を栽培し，外国からの輸入超過を解消する面もあったという．元丈はこれを翻訳し，『阿蘭陀本草和解』を書き残した[13]（図8）．これを助けたのが耕牛の父である吉雄藤三郎[14]らであったというのが定説である[12]．しかし，この文章からのみでは，吉雄藤三郎の役割は明確ではない．上巻には吉雄藤三郎による『辛酉（注：1741年）阿蘭陀本草之内御用ニ付承合候和解』という承合和解が2種類残されている．これは，おそらく藤三郎自身の手によるものと思われるが，ここで示された方法を基本として，次年度以降『阿蘭陀本草和解』全体の解読が進められたと考えられる[15]．もう少し具体的に述べると，『阿蘭陀本草和解』における各薬草の記載順序であるが，

1. 各薬草の番号，オランダ名（カタカナ），ラテン名（カタカナ），
2. 日本名（漢字又はカタカナ），

3. 各薬草の概要，
4. 病気に対する各薬草の薬効，使用法等を箇条書きにしている．

藤三郎は『阿蘭陀本草和解』において，重要な役割を果たした考えられるが，残念なことに，この翌年の寛保2年（1742）7月28日，平戸町の自宅で死去している[14]．彼自身は『阿蘭陀本草和解』の完成を見ることはなかった．次に，この方針の元に『阿蘭陀本草和解』がどのように，作成されていったか，また吉雄耕牛がどのように関与していったかについて，述べる．

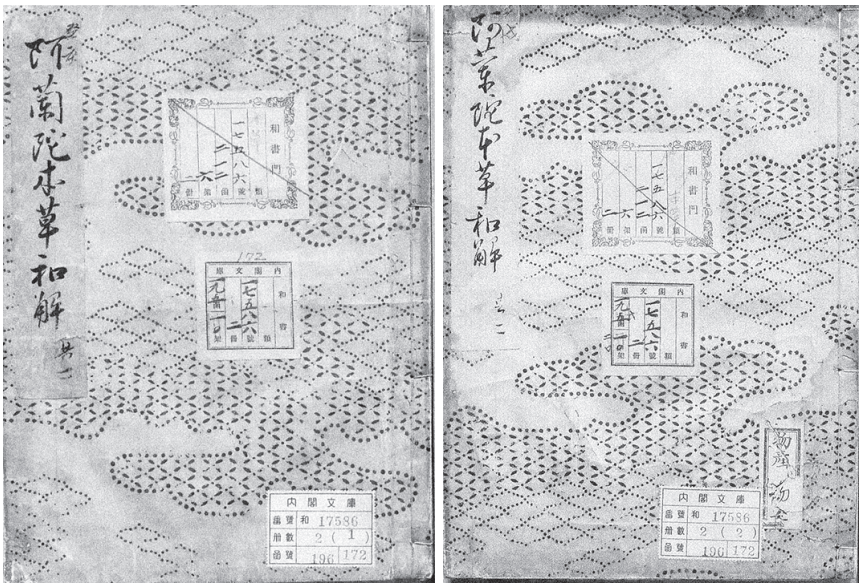


図8　2分冊の『阿蘭陀本草和解』表紙

全二巻の本書を閲覧すると，ほぼ毎年3月に十数種ずつの草木が取り上げられ（寛保3年（1743）から寛延3年（1750）），記載されているが，これは阿蘭陀商館の館長と在留医師（主としてフィリップ・ピーテル・ムスクルス）[16]，通詞が長崎屋に滞在中のことである．つまり，江戸に滞在中の阿蘭陀人医師が通詞を通して翻訳させた内容を元丈が和解（わげ）し，写したということになる．

では，藤三郎の息子の耕牛が実際にこの翻訳に関係しているのかが本論文のテーマでの一つでもある．寛保3年（1743）小通事（ママ）　吉雄定次郎の名がある（図9左）．定次郎は耕牛の若年時の名前である[3]．また，延享4年丁卯三月　小通詞　吉雄幸左衛門の名がある（図9右）．幸左衛門は耕牛の成人後の名前である[3]．次に，この『阿蘭陀本草和解』の2冊中寛延2年（1749）の部分がないが，この年の江戸番通詞の大通詞は吉雄幸左衛門である[17]．何故この年だけ無いかは別として，寛保3年（1750）まで和解は行われているので，2年も行われたと考えられる．このように翻訳の始めごろの年から『阿蘭陀本草和解』と関係したことが判る．

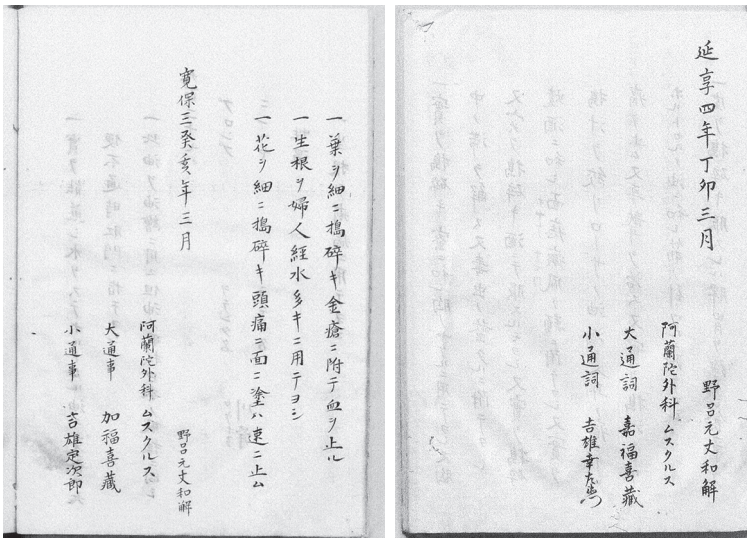


図9　『阿蘭陀本草和解』の吉雄耕牛に関連する記述．左は寛保3年版　小通事　吉雄定次郎，右は延享4年版　小通詞　吉雄幸左衛門の名が見える．

合田強が長崎に行った年は既に本論文『はじめに』の項で書いているが宝暦12年（1762）である．この時の講義に『草木誌』が使用されたのが，元丈の翻訳が終わってから，12年後となる．この時の薬草は汗・吐・下を中心に講義をされているが，無論，ドドネウスの『草木誌』には，様々な薬効をもっている1500種弱の薬草が記載されている．しかし，当時の日本では，この全てを解明することはできなかったであろう．当面，臨床に有効な薬草を選んで講義をされたと考えるのが妥当と考える（後述）．

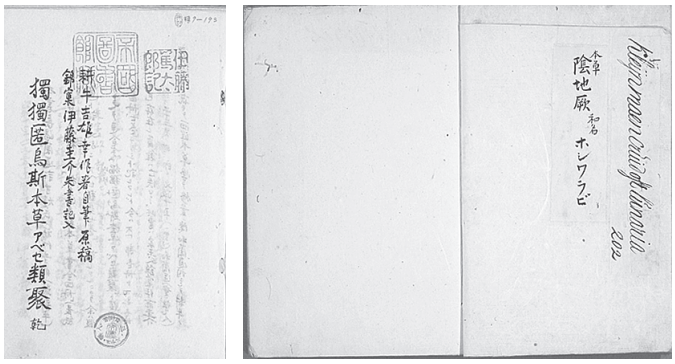


図10　『独独匿烏斯本草アベセ類聚』[18]

また，すでにこれもよく知られているが，耕牛は生前は一冊の本も刊行しなかった[19]．片桐一男によれば，吉雄耕牛の訳書で，生前に出版の機を得たものは一点もない．吉雄耕牛が出版を意図していなかったことは明白である．「秘事」としていたのである．すべては写本で各地に伝わっている[19]．しかし，いくつかの手書き本が残っている．それが『独独匿烏斯本草アベセ類聚』[18]（『アベセ類聚』と略）である．吉雄耕牛の子でオランダ通詞であった吉雄権之助（1785～1831）[20]が，熱心

に本草学を学ぶ伊藤圭介[21]の姿を見て，耕牛自筆原稿である『アベセ類聚』を贈った[18]．これは全七巻であるといわれているが，現存するものは二巻でアベセのKLとPである[18]．図10には表題紙（左）と，吉雄耕牛の手書きのラテン名と漢字名と和名（右）が書かれた原稿を示した．これらの内容に関する詳細は，末裔の伊藤篤太郎によって表題誌の次に書かれている．附録3にその原文を示した．

吉雄家の3代に渡る阿蘭陀本草への関わりを概説した．

5　本草研究史における『西洋醫述　巻四』の位置づけ

歴史的な観点から『巻四』を見てみる．これは本論文の意義を明らかにする面からも重要であろう．

阿蘭陀本草学において，やはり最初に“Cruydt-Boeck”を翻訳された『阿蘭陀本草和解』について述べねばなるまい．重複がある場合は了とされたい．

これは，抄訳に分類される．必要な部分のみを訳し，さらに図は入っていない．しかし，図は必要なかった．その理由は以下である．

各草木の前に番号がうってあるが，これが所載本草の原本のページ数である[15]．よって原本さえあれば，図を見ようと思えばいつでも見えたという事になる．抄訳という名から受ける印象とは裏腹に，9年間の成果として100余種の本草を取り上げ，さらにその種類は1500弱のページ数を有する原本の最初から，最後に亘るまで含まれている[15]．次に，本書の翻訳の目的について考える．徳川吉宗は，本草の中国，阿蘭陀からの輸入超過を解消したかった．そのために本草家の野呂元丈に命じて，翻訳を行わせた．よって既に述べたが，本草の阿蘭陀名，和名，漢方名，薬効は必須であった．このために毎年3月（1742～1750年）の江戸参内に合わせて，在留医師，江戸番通詞が参加し，本書を作成した．この版は江戸城内の紅葉山文庫に収納され，誰でもが閲覧できることはなかったと思われる．しかし，吉宗生前の施策としては小石川植物園，療養所を開き，人参や甘薯等を代表とする各種本草の栽培を行った[12]．また，この目標のため平賀源内が師の田村元雄と，毎年（宝暦7年（1757）～宝暦12年（1762））のように物産会を開催する．更に翌13年には『物類品隲』を発刊する．これらが，具体的な目標達成の政策の実施と考えればよいかもしれない[12]．

次が1762年に書かれた本講義録である．『阿蘭陀本草和解』に遅れること12年後である．これも抄訳に分類される．ただし，本論文で示したようにこの講義録には，図が入っている．何故なら，合田強は原本を持っていなかったからであろう．また，教育の一環として模写をさせたことも一因であろう．ここでは，5種の本草しか載せられていないが（図なし1種を含む），この本草に関する講義が行われたのは閏四月十六日の1日間である[2]．この日には，他の病気や薬物に関しても講義を受けているので，5種の本草に関する講義は，数時間に満たないのではなかろうか．しかし，強は本論文で示した様に非常に詳細な図を模写している．

一方，時代は下るが『アベセ類聚』は，抄訳で図はない[18]．その内容は図9右で示した．斜体のラテン名が書かれているが，その後に算用数字が朱色で書かれている．これは，原本のページ数である．次に本草名が漢字で書かれていて，次に和名がカタカナで書かれている．薬効等の記載は一切ない．片桐一男が明らかにしているが，耕牛は少なくとも20冊の阿蘭陀書を持っていた．その中の7番目が度度奴斯（ドドネウス）である[22]．よって耕牛は，原典を持っていたので図も薬効も必要なかった．ただし，必要最小限の情報を記した覚書は必要であった．これが現在に伝わっている『アベセ類聚』と考えられる．

次に，成秀館における講義の内容を別の視点から考えてみる．野村立栄なる人物に吉雄幸作（永章）が与えた修了証明書というべき文書が残っている[23]．名付けて，『授吉雄家學之秘條』という

（天明三卯正月（注：1783年，耕牛　60歳））．習得した科目は十項目で，第一　紅毛文字，第二紅毛方言から始まるが，その中の第六　服薬法がある．合田強の講義録とも考え合わせ，阿蘭陀本草の項目は，この服薬法に入っていたと考えられる．

では，これらの草木はどのように選ばれたのか？ 一番簡単な想像は，かって耕牛が従事した『阿蘭陀本草和解』との重複であろう．ことに自身が江戸番通詞として翻訳に関与した薬草との関連が考えやすい．しかし，実際に閲覧可能な『アベセ類聚』の18種類の薬草と，約百余種の『阿蘭陀本草和解』にリストアップされた本草との一致するものは3種類にすぎない[13]．これらは三百九十七の菖蒲（寛保2年，大通詞　中山喜左衛門，小通詞　茂　七郎左衛門），三百九十一の梹榔（延享2年，大通詞　末永徳左衛門，小通詞　楢林重右衛門），三百三の白ユリ（寛保2年，大通詞　中山喜左衛門，小通詞　茂　七郎左衛門）である．しかも両書に記載された本草名や和名は異なる．さらに，本論文で引用した5種の薬草の中で，『阿蘭陀本草和解』と共通するものは1種で，千四百四十九の丁子（上巻の第5分冊目，延享5年（1748），大通詞　今村源右衛門，小通詞　名村三太夫，森山金左衛門）である．吉雄耕牛の江戸番通詞の年ではない．よってこの仮説は否定された．翻訳の目標が異なると考えれば，当然であるともいえる．つまり，『阿蘭陀本草和解』の目的はすでに述べたが，「本草の中国，阿蘭陀からの輸入超過を解消したかった」[12]．では，『アベセ類聚』の目標とは何か？ 既に述べたが，最も理解しやすいのは，阿蘭陀薬草の耕牛自身への覚書ではないだろうか？ 斜体文字で書かれた薬草名，算用数字，本草名，和名のみという必要最小限の情報であることから，覚えに書いておいたというのが納得しやすい．更にこの覚書は，時には講義にも利用されたし，自身が患者に使用する時にも利用したのであろうか．さらなる解明が必要であろう．

6　まとめと考察

本論文では，以下を明らかにした．

1. 吉雄耕牛の成秀館における合田強の講義録『巻四』で模写されている植物図はドドネウスの『Cruydt-Boeck（草木誌）』を写したものであったことを明らかにした．
2. 吉雄家三代にわたる『草木誌』との関連の文献的考察を行った．これらは『阿蘭陀本草和解』，『巻四』，『アベセ類聚』等である．
3. 吉雄耕牛が関係した3種の翻訳書のそれぞれの特徴と，『巻四』との関連について明らかにした．

これらの作成の経過を見てみれば，当時，手探りで阿蘭陀医学を取り入れようとした苦労がしのばれる．これらの書物には，それぞれの困難な仕事に当面した人物達が，できうる限りの努力と技能を発揮した成果が残されている．

さらに，前2書（『阿蘭陀本草和解』と『巻四』）は，鎖国時代に阿蘭陀書の解禁に伴い，解読が始まった当初の記述であり，共に歴史的に重要な写本である．この時代背景は本論文を読む上で，重要である．『解体新書』が発刊された安永3年（1774）[24]をさかのぼること，『阿蘭陀本草和解』で24年，『巻四』で12年である．この時代は，阿蘭陀語の教科書を見ることさえまれであり，さらに『草木誌』は別としても（当時，国内では5冊）[25]，ハイスターの『外科学』やブランカールトの『解剖学』はほとんど，日本には入っていなかったと思われる．これらの教科書を，直接に手にとり，その図を模写できたことは，大いなる感激であったことと同時に，新しい医学を知るという喜びであったことだろう．

また，耕牛が実際の講義に『草木誌』を用いて，その図を模写させていたことは，当時としては画期的な講義であったことは間違いない．日本中で誰も行っていなかった講義であり，実習であったに違いない．既に述べたが，講義録の巻三では主に解剖学の教科書（ブランカールト）と外科学の教科書（ハイスター）を用いて講義を行ったことが判っている[8]．当時としては最先端の医学講義

が行われていたと考えられる．

これらの秘事であった業績を書き残した合田強の講義録の内容を明らかにすることで，不明であった成秀館における吉雄耕牛の医学教育の一面を照会できたと考える．

参考文献および注

1）合田強．享保9（1723）～安永2（1773）．讃岐国豊田郡和田浜生まれ（現香川県観音寺市）．父は合田伝右衛門吉盤．弟は合田大介（蘭斉）．名は強，字は千之，通称求吾，温恭，号は巨鼈，鼈山．幼少の時，合田又玄，高橋柳哲について医を修め，宝暦2年（1752年）2月京都にて松原一閑斎に医と儒を学んだ．その後，長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ後，宝暦12年（1762）5月長崎より讃岐へ帰る途中の南肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い，2人に長崎に遊学を勧める．墓は香川県観音寺市豊浜町和田浜．

2）板野俊文，田中健二．合田強の『西洋医述　巻四』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2017；63(1): 133–146

3）吉雄耕牛．享保9（1724）生　長崎　寛政12（1800）長崎で他界，享年77歳であった．江戸時代中期の和蘭大通詞であり，蘭方医として吉雄流外科を開祖した．名前は初め定次郎，次いで幸佐衛門，のちに幸作，幸載と称す．諱は永章，号が耕牛，養浩斎，成秀館ともいう．耕牛は長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ，少年時代から出島のオランダ商館に出入りして，寛保2年（1742）年の19歳のときに小通詞になり，寛延元年（1748）には大通詞となった．

4）板野俊文，田中健二．合田強の『西洋医述　巻三』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2016；62(1): 75–92

5）板野俊文，田中健二．合田強の『西洋医述　五』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2017；63(3): 352–360

6）板野俊文，田中健二．合田強の『紅毛醫述　巻一』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2017；63(4): 514–528

7）板野俊文，田中健二．合田強の『紅毛醫言　巻二』の解題と翻刻　日本医史学雑誌　2018；64(1): 86–104

8）板野俊文．合田強の『西洋醫述　巻三』に書かれた図の原典から明らかになった事　日本医史学雑誌　2020；66(4): 386–399

9）HERBARIUS oft CRUYDT-BOECK van REMBERRTUS DODOENS［Internet］Antwerpen, 1644［cited 2020, August 22］. Available from from https://www.biodiversitylibrary.org/item/30655#page/　具体的な書誌等は本文と附録1を参照の事．

10）奥田拓男編．最新生薬学　第2版，東京：廣川書店；2011．p. 150

11）参考文献10，p. 184

12）土井康弘．本草学者　平賀源内，東京：講談社，2008．p. 156–160

13）『阿蘭陀本草和解』の表紙　国立国会図書館　上巻，和17586，冊数2（1）品号196-0172，下巻，和17586，冊数2（2）品号196-0172，https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/detail/detailArchives/0412000000/0000001015/00（2020年8月22日閲覧）

14）吉雄藤三郎．生年未詳．江戸時代中期の阿蘭陀通詞．吉雄家第四代目．享保八年（1723）口稽古を命ぜられ，翌年御用生類方を加役，同年稽古通詞となる．同十四年（1729）幕命により御用掛通詞目付今村市兵衛とともに，オランダ人調馬師ケイズルに付添って江戸におもむき，翌年3月まで浜御殿に滞在，銀5枚の賞賜をうけて4月に長崎に帰着．同年小通詞にすすみ，元文，元文3年（1738）大通詞に昇進．この間，元文5年に年番通詞を翌寛保元年には江戸番通詞を勤めた．寛保2年（1742）7月28日，平戸町の自宅で死去．長男が吉雄耕牛である．（片桐一男）洋学史事典　日蘭学会編　東京　雄松堂出版，1984，p. 737

15）板野俊文．『阿蘭陀本草和解』の謎を解く（日本医史学雑誌：投稿準備中）

16）Philip Pieter Musculus．1739～1747まで在留医師を勤める．この間に野呂元丈を助け，『阿蘭陀本草和解』の翻訳を助ける．洋学史事典　日蘭学会編　東京　雄松堂出版，1984，付表4，p. 63

17）江戸番通詞．洋学史事典　日蘭学会編　東京　雄松堂出版，1984，付表4，p. 70

18）独独匿烏斯本草アベセ類聚．国立国会図書館　特7-193，044-001　https://www.ndl.go.jp/nichiran/data/R/044/044-001r.html（2020年8月22日閲覧）

19）片桐一男．江戸の蘭方医学事始　和蘭通詞・吉雄幸左衛門　耕牛，　東京　丸善，2000，p. 97

20）吉雄権之助．天明5年（1785）～天保2年（1831）江戸時代後期の阿蘭陀通詞．名は永保，また尚貞，号は如淵，権之介は通称．吉雄耕牛の子．文化6年（1809）蛮学世話掛，同8年（1811）小通詞末席，同14年（1817）には小通詞並になっていたという．蘭医レッケから外科を修めたという．シーボルトが鳴瀧学舎で診療と教授に際しては，よくその通訳に当たり，諸生にオランダ語を教授した．天保2年5月21日歿．洋学史事典　日蘭学会編　東京　雄松堂出版，1984，p. 736

21）伊藤圭介．享和3年1月27日（1803年2月18日）–明治34年（1901年）1月20日）は，幕末から明治期に活躍した理学博士．男爵．「尾張国名古屋（現愛知県名古屋市）出身．名は舜民，清民．字は戴堯，圭介．号は錦窠．博物学者．医師西山玄道の次男として生まれる．本草学や蘭学を学び，文政10年（1827）長崎でシーボルトから植物学を学んだ．シーボルトから贈られたツンベルク『日本植物誌』をもとに『泰西本草名疏』を著し，日本で初めてリンネの体系を紹介した．文久元年（1861）幕府の蕃書調所に登用される．明治14年（1881）から東京大学教授．21年には日本最初の理学博士となった．https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/233.html（2020年8月22日閲覧）

22）文献19，p. 102–103

野村立栄．宝暦1年（1751）―文政11年9月14日（1828年10月22日），江戸中期の蘭方医．字は伯正，諱は元幸．立栄は通称．号は方円斎，三扇堂，三学

堂など．美濃国（岐阜県）高須藩士舎人宇右衛門の子に生まれ，藩医野村立見の養子となり，明和7年（1770）に美濃石津郡徳田村に本道兼外科を開業．転居を重ねて，のちに長崎へ遊学．吉雄耕牛から天明3年（1783）1月，オランダ語と金創跌撲療法に関する免状を授けられ，同年9月，名古屋中御園町で開業．寛政7（1795）年に町医で御目見・御用懸医師，文政9（1826）年に隠居．医業の後半生は名古屋蘭学の基礎を固め，弟子の養成に尽力した．水谷豊文（寛政8年入門）の蘭学的知見が，江戸参府のシーボルトを感心させたのもその例証．〈著作〉『免帽降乗録』『医家姓名録』〈参考文献〉安藤次郎『尾張蘭学者考』，吉川芳秋『本草蘭医科学郷土史考』（岩崎鐵志）　朝日日本歴史人物事典

23）文献19，p. 93–95
24）小川鼎三，酒井シヅ．解体新書，日本思想大系65．東京　岩波書店，1972　p. 207–359
25）城福　勇．平賀源内の研究，東京　創元社，1976　p. 21–22.

附録1

『草木誌』の表紙の下の部分の図と書誌に書かれた人物について解説する．

Dodoens, Rembert, 1517–1585

レンベルト・ドドエンス，ラテン名Rembertus Dodonaeusは，（1517年6月29日，生まれ，1585年3月10日死亡）フランドルの医師，植物学者．

ドドエンスは1535年にルーヴェンカトリック大学（ルーバン）から医学の学位を取得し，短編論文*De frugum historia*（1552）で植物学に転じた．彼の大規模な『草木誌』によって「ドイツ植物学の父」とよばれるようになった．ドドエンスは，植物をアルファベット順に並べる代わりに，その特性と相似性に従って植物をグループ化した．1557年にフランス語に翻訳され，ヘンリーライテの1578年の英語翻訳によってイギリスの標準となった．ドドエンスは，神聖ローマ皇帝マクシミリアン2世と彼の後継者であるルドルフ2世の医師を務めた．彼は1582年にライデン大学の医学部に加わった．（ブリタニカ百科事典より）

Clusius, Carolus, 1526–1609

カロルス・クルシウスまたはシャルル・ド・レクリューズ（Carolus Clusius，Charles de l'Écluse, L'Escluse，1526年2月19日～1609年4月4日）は，フランス生まれのフランドルの医師，植物学のパイオニアである．16世紀の園芸に対して最も影響力のあった植物学者である．

1557年にアントワープで，レンベルト・ドドエンスの『植物誌』のフランス語訳を出版したのが，最初の著書で，その後，アントワープの植物関係の出版人と協力して，図版入りの多くの著作を出版した．

https://en.wikipedia.org/wiki/Carolus_Clusius

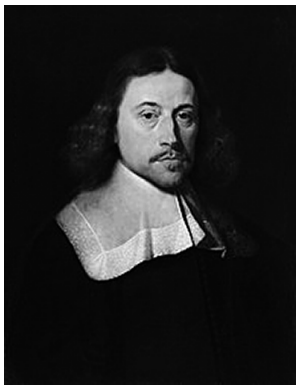
（2020年8月22日閲覧）

Raphelengius, Justus, 1573–1628

ラフェレンギウスは，16世紀と17世紀のフランダースの印刷家の一族であった．姓は，オランダの姓であるが，ラテン語のRavelingenに由来したフランドルの地名Ravelingenによっている．

祖先のフランシスカス・ラフェレンギウス・ザ・エルダー（1539–1597）は，1585年に彼の義理の父であるクリストファー・プランタンのライデンにある印刷所の運営を引き受けた．彼の3人の息子，クリストフ（1566–1600），フランシスカス（1568-c. 1643），そしてジャストゥス（1573–1628）は，父親の死から1619年まで家を経営した．

https://artsandculture.google.com/entity/　（2020年8月22日閲覧）



Balthasar II Moretus, 1615–1674

プランタン＝モレトゥス印刷博物館は，クリストフ・プランタン（1520頃–1589）の邸宅と印刷工房Officina Plantinianaが起源となっている．また，博物館の名前は創業者のクリストフ・プランタンと後継者のヤン・モレトゥス（1543–1610）に由来する．ルーベンスとクリストフの孫バルタザール・モレトゥス1世（1574–1641）と学友で親交もあったので，一族の肖像画を描いたほか，書籍のタイトルページや挿絵を依頼されている．2005年にプランタン＝モレトゥス博物館全体が世界遺産として認定された．

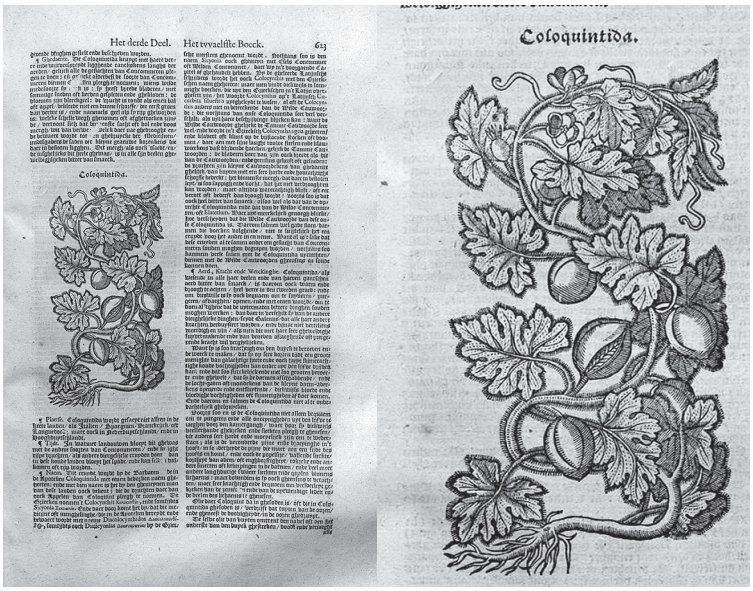
http://www.arukikata.co.jp/webmag/bn/belgium01_05.php

（2020年8月22日閲覧）

附録 2

『紅毛醫言　巻二』の図について

数は多くないが，巻 2 にも薬草が書かれている．その図を示す．なお，これはよく似ている図ということで，『草木誌』の図も示す．

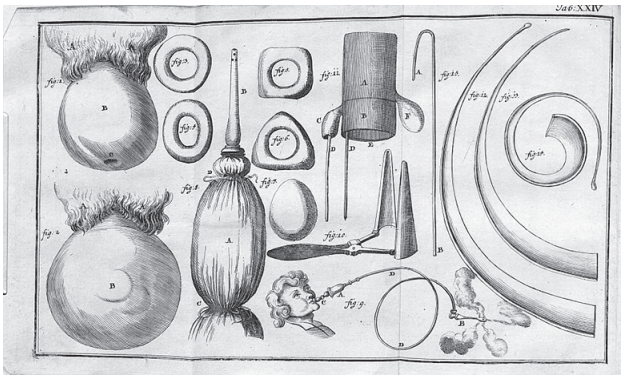


巻 2 の解説は以下である．

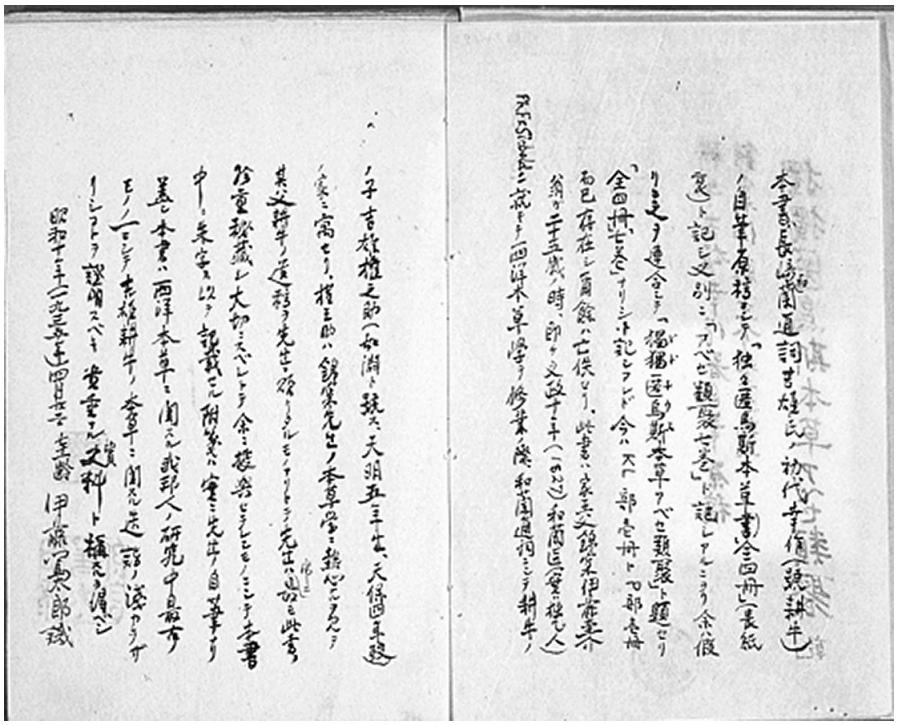
肛門突薬ノ能

〇コロセインテスノ能　　実也　下スモノ也　胃大腸ノ穢物ヲ下ス　数年結タルヲ下ス　一匁ヨリ二匁五歩位迄用ユ　実ヲ用ル也

次に巻二に書かれた図でローレンツ・ハイスターから写された図も参考として示す．



附録 3



なお，この間のいきさつを示す内容は末裔伊藤篤太郎自筆の解題によれば，吉雄幸作（耕牛）の自筆原稿で，祖父伊藤圭介が長崎でシーボルトに学んでいた時，耕牛の子吉雄権之助から贈られたものという．ドドネウス『草木誌』によると思われる植物の蘭名と漢名，和名を記した紙片を貼付している．圭介の朱書による植物解説を貼ったページも交える．書名は，書中に見える標題を合わせ伊藤篤太郎が命名したものと思われる．

翻刻は以下の通り

本書，長崎和蘭通詞吉雄氏の初代幸作（號耕牛）ノ自筆原稿ニシテ「独々匿烏斯本草書」全四冊（表紙裏）ト記シ又別ニ「アベセ類聚七巻」ト記シアルニヨリ余ハ假リニ之ヲ「獨獨匿烏斯本草アベセ類聚」ト題セリ　「全四冊」「七巻」ナリシト記シアレド今ハ KL 部壱冊と P 部壱冊而已存在シ爾餘ハ亡失セリ，此書ハ家王父錦窠伊藤圭介翁ガ二十五歳ノ時，即チ文政十年（1827）和蘭医（實ハ独乙人）Pf.Fr. Siebolt ニ就キテ西洋本草學ヲ修業ノ際，和蘭通詞ニシテ耕牛ノ子吉雄権之助（如淵ト號ス，天明五年生，天保四年歿）ノ家ニ寓セリ，権之助ハ錦窠先生ノ本草学ニ熱心ナルヲ見テ其父耕牛ノ遺稿ヲ先生ニ贈リタルモノナリトテ先生ハ常ニ最モ此書ヲ珍重秘蔵シ大切ニスベシトテ余ニ授與セラレシモノニシテ本書中ニ朱字ヲ以テ記載セル附箋ハ實ニ先生ノ自筆ナリ

蓋シ本書ハ西洋本草ニ関スル我邦人ノ研究中最古ノモノノ一ニシテ吉雄耕牛ノ本草ニ関スル造詣ノ浅カラザリシコトヲ証明スベキ貴重ナル資料ト称スルヲ得ベシ

昭和十二年（一九三五年）四月廿ニ日　七十一齢伊藤篤太郎識

What Was Clarified from the Original Source of the Figures Written in the Notebook "Seiyo Ijyutsu, Volume 4" Written by Tsuyoshi Goda

Toshifumi ITANO

Kagawa University

Tsuyoshi Goda was a medical doctor in the middle Edo period who wrote notebooks that summarized the lecture records of Kogyu Yoshio (1724–1800) at Seishukan. Several figures in volume 4 were botanical ones. I examined the origin of these cited figures in the notebook. Part of these turned out to be Rembert Dodoens' (1517–1585) Cruydt-Boeck (1644). I also examined the influence of Rembert Dodoens and Kogyu Yoshio's subsequent impact in Japan.

Key words: Tsuyoshi Goda, Kogyu Yoshio, Seiyo Ijyutsu Volume 4, Rembert Dodoens, Cruydt-Boeck